佳作 ―第一部門―

心こそ大切

神奈川県
田辺美起（たなべみき）

「おはよう」

と言って、私は教室に入った。でも、いつもと雰囲気が違う。誰も私を見ようとしないし、重くて冷たい空気が教室を包んでいた。クラスの全員が私と口をきいてくれない。それは、いじめだった。

小学六年生のときだった。日光へ一泊二日で修学旅行へ行った。私の目は、網膜色素変性症という

病気で、幼いころから夜盲症と視野狭窄があった。生まれつき弱視だったため、修学旅行では担任の先生が私の手を引いて歩いてくれた。夜は、先生が仲良しの友人達に

「美起は目が悪いから、どこかに行くときは一緒に手を引いて連れて行ってやってくれ」

と頼んでくれていた。その友人達は、先生に言われたとおりに、私の手をよく引いて面倒をみてくれた。修学旅行から帰って来て、私の母は、その友人達にTシャツをプレゼントした。私は内心ではそんなことをする必要はないのに、と思っていた。多分、母はこうなることを予測していたのだと思う。

「美起ちゃんと一緒にいると手を引いて歩かなくちゃいけないから、一緒に居ない方がいいよ。自由が奪われちゃうよ」

と、クラス中の仲間に彼女達が言いふらしていたのである。

私は人に何かをしてもらうことがこんなに大変で辛いことだと、初めて実感した。

そして、中学二年生のときに、一泊二日でキャンプがあった。私は担任の先生に

「友達を失いたくないから、キャンプには行かない」

と話した。先生は私の辛い体験を聞いて

「それは小学生だったからで、中学生になればみんな変わってるよ」

と笑って言った。

私は一番仲良しだったAさんに打ち明けてみた。彼女はほほ笑みながら

「一緒に行こうよ。美起ちゃんが行かなくちゃつまらないよ。私が手を引いてあげるから」
と言ってくれた。キャンプの当日には、彼女は本当によくしてくれた。私から片時も離れずに、身の回りの世話をしてくれた。それからAさんは私の大親友となり、今でも一番信頼できる友人である。

私は薄暗い廊下や体育館などに入るとほとんど見えなかったので、手探りで歩いていた。知らない人達は私がもたもたしているので、鈍(どん)くさい人に見えたのだと思う。「見えない」という弱点があったので、私はいつもおとなしく、目立たないようにしていた。しかし、いじめっ子達は、私の存在を見逃さなかった。

小学生までは、時々いじめのターゲットにされたが、親に言えば親が解決してくれた。しかし中学になると、さすがに親にも打ち明けられず、もちろん先生にも言えなかった。中学からは、男子に目を付けられるようになった。私は何とかしてこのいじめから逃れなくてはならないと必死で考え始めた。

そして、勉強でクラスのトップになることを誓った。私は夜盲があったので、塾に通うことは難しいと考えた。だから、独学で学ぶために、本屋に行って教科書ガイドや問題集を買い、死ぬ気で勉強した。最初のころの成績は、クラスの中でも真ん中より下の方だった。やがて少しずつ成績が上がりだし、先生が答案用紙を返すときに、上位で名前が呼ばれるようになっていった。

「あいつ、意外と頭がいいんだな」
とみんなに認められるようになり、いじめがなくなった。
高校でも五百四十人中十番以内には必ずいた。こうして私はいじめられたくない一心で、とにかく勉強をした。
高校三年生の夏に、私は小学校の教師になりたいと思って、ある大学に見学に行った。
そこで運良く大学の先生とお会いすることができた。私は、それまでに心配していた悩みを思い切って相談してみた。
「私は夜盲症と視野狭窄があるのですが、教師になれるでしょうか？」
すると、大学の先生は、私の目をじっと見つめて、
「あなたが教師の資格を取得することは自由です。しかし、林間学校などで、もしあなたが見えなくて子供がけがをしてしまったらどう責任を取るつもりなのですか？　腕のない人が調理師の免許を取るのと同じことです」
と厳しい口調で言われた。
私はとてもショックを受けた。それまでの私は、自分の目の病気を単なる弱点や短所と考えていた。しかし社会的に見れば、私の目は「障害」だったのである。
いくら努力してもお金があっても、どうにもならない障害というものであることに気づかされたの

である。私は奈落の底へ突き落とされたような気分で、目の前が真っ暗になった。そして、今まで自分自身がいかに現実から逃げていたのかを、気づかされたのである。

逃げれば逃げるほど、壁は大きく私の前に立ちはだかっていた。私はやっと、自分の障害と向き合うことになった。

教育学部をあきらめて、進路変更をせざるを得なくなった。自分の将来や生き方を見つけるために、自宅から近くて日が沈む前までに帰宅できる大学に進学することにした。

ひとりぼっちで入学した大学では、誰も私のことを知らなかった。だから、自分から「見えない」ことを伝えなければ誰も私の障害には気づかず、助けてもらうこともできなかった。私は、生きる価値が見いだせず、真剣に死ぬことを考え始めていた。無様（ぶざま）な姿をさらして、惨（みじ）めな生き方をするしかないなら、死んでしまいたいと思った。

「障害」と「生と死」、そのことばかりが私の頭の中にあった。

そんな自分に問い続けていたときに、母が幼いころから私に言い聞かせてきた言葉が思い出された。

「人間は誰でもその人にしか果たせない使命があって生まれてきたのよ。美起、お前にもお前にしか果たせない使命があるから、頑張って生きていこうね」

と。

これは、医者から将来失明すると宣告されたときに、五歳の私に母が諭すように言った言葉だった。

「目が見えない私がこの世で果たせる使命なんてあるのだろうか？　私が人のためにできることは何なのだろうか？」

そんな苦もんの中で、私は知人からあん摩師・はり師・きゅう師という仕事があることを教わった。そして、私は盲学校の専攻科理療科に進学することにした。

盲学校に入学するためには障害者手帳が必要であることを教えられて、私は二十二歳のときに視覚障害者に認定された。

昨日までは、健常者の世界にいた私が、今日からは障害者の世界に身を置くことになった。「健常者」と「障害者」の二つの世界。

私は、盲学校で障害者として生きることになった。そこで出会った全盲の人達は、とてもたくましかった。「見えない」ということを前面に出して、できることはやるけれども、できないことは見える人にきちんと頼んで助けてもらって生活をしていた。ある全盲の人は、結婚をしていて、奥さんも子供もいたし、ある全盲の人は一人で海外旅行も行ったりして、楽しんでいた。無様でも惨めでもなく、立派に堂々と生きている姿がそこにあった。

私は、彼らに感化されて、生まれて初めて白い杖を持つことを決心した。今までは「見えない」と言うことをひたすらに隠して生きてきた私だったが、「障害」を真正面からとらえて、自分に挑戦す

るつもりで白い杖を持った。

白い杖は、私にとって社会への挑戦状でもあった。

「私は、目が見えません。私を馬鹿にするならどうぞしてください。でも私は、あなた方に馬鹿にされるような生き方はしません。必ず私の使命を見つけて、誰にも負けない生き方をしてみます」

と。

私は三年間盲学校で学び、あん摩・マッサージ・指圧師、はり師、きゅう師の資格を取得した。そして盲学校の教師になるために、さらに筑波大学理療科教員養成施設に進学した。

一度はあきらめた教職への道だった。私が「障害」という壁にきちんと向き合って挑戦し始めたときに、再び、私の目の前に道が開けたのである。

白い杖を頼りに一人暮らしをしながら、大学を卒業した。

そして、二十七歳のときに、神奈川県立平塚盲学校に理療科の教師として赴任した。

教壇に立ってまもなく、私の目は普通の文字を読むことができなくなってしまった。夏休みに入り、私は悶々とする日々を送った。そして、九月一日。私は学校へ行くことができずに、休んでしまった。

「もう、だめだ。点字で授業なんてできない。やっと教師になれたのに、あきらめるしかないんだ」

深い絶望感と悔しさで涙がとめどなくあふれて来た。悲嘆に暮れていた私に義理の姉が厳しく

叱咤(しった)した。

「あなたは何のために教師になったの？　目が見えなくなって、文字が読めなくなって、教師を辞めたら、生徒はどう思うの？　教師なら、そこからどうはい上がって行くのか、その生き様を見せることが本当の教育じゃないの？」

私は強い衝撃を受け、目が覚める思いだった。

「何を甘えていたんだろう。何も闘わずに私は逃げようとしていた。もう一度やってみよう。挑戦し抜いてから教師を辞めるなら、悔いはないだろう」

と思った。

それから私の点字への挑戦が始まった。点字の教科書を開き、指で読んでみた。初めはなかなか思うようには読めずに、内容を理解することができなかった。同じところを何度も何度も繰り返し読んだ。あるときはいらいらして教科書を投げ出したり、悔し涙で点字のボツボツが薄くなってしまうこともあった。

五十分の授業をするために三時間の予習が必要だった。寝る間も惜しんで、点字でノートを作成した。

教壇に立つと胸がドキドキして、足がガタガタ震えた。自分で作ったノートをたどたどしく指で読みながら授業を進めた。生徒に教科書を読んでもらうと、点字を読むスピードが間に合わずに置いて

いかれた。
「せんせーい！　どこまで読めばいいんですか？」
と馬鹿にした口調で生徒が言った。私はにっこりほほ笑んで
「適当なところでやめてよ。気が利かないのね」
と答えた。
私にはもう教師としてのプライドも虚栄心もなかった。ただ、人間として誠実に、私のできる精一杯の生き方を彼らに見てもらいたかった。
それから数日後、授業が終わったときに、ある生徒が
「先生は根性があるね。俺だったらできないかも」
と、にこにこしながら大きな声で私に言った。
私はうれしかった。私の思いはしっかりと彼らに通じていた。それから、彼らは私を助けてくれるようになった。
私の心の中に、教師はこうあらねばならないという勝手な思い込みがあり、生徒の前では弱みを見せてはならないと思い違いをしていた。私は教師である前に、障害者である前に、一人の人間であることに気が付いたのである。
悔しければ泣けばいいし、うれしければ喜べばいい。人間として、素直に心を開いて、生きていけ

ばどんなに険しい道でも歩いていけると確信した。

ある生徒が、

「先生、白い杖がどうしても恥ずかしくて持てないんですが……」

と私に相談してきた。

「持たなくていいんじゃないの？　あなたが持ちたいと思えるまで、たとえ物にぶつかったり、つまずいたりしても持たなくていいよ。私のように、白い杖をつかなくては歩けなくなるときが来たら持つしかなくなるからね」

生徒はぽろぽろ涙をこぼしながら、

「それでいいんですか」

とほっとしたようにうなずいていた。

またある生徒は、

「先生。文字が見えづらくなってきたのですが、点字をやらなくちゃだめですか？」

と聞いてきた。

私は

「それはあなたが決めることです。普通文字を捨てて点字で生きるということは、それだけ自分の目が見えなくなったということを自覚することです。長年使用してきた文字を捨てることはとても辛い

ことです。点字を習得するということは、自分の心の壁を越えることです。心が決まれば、点字なんてすぐに覚えられますよ」

と答えた。

生徒達からの質問に対する私の答えは、多分、盲学校の他の先生方の答えとは違っていると思う。でも、私の答えは自分自身が生きてきて、同じことで悩み、苦しんできた結果、行き着いた答えなのである。それだけに、いつも生徒の心に響くように思えた。

人生には無駄がないと思った。私の使命は、盲学校の教師になり、同じ境遇の生徒達とその苦しみを共感しあい、共に励ましあいながら生きることにあると考える。

私は三十一歳のときに、この盲学校で知り合った主人と結婚し、翌年に娘を出産した。

私は幼いころから視覚に障害があったため、将来結婚することができるとは考えてもいなかったし、母親になれるなんて夢のようだった。だから、生まれてきた娘は私にとって大切な宝物となった。私は精一杯(いっぱい)の愛情を注いで、この子だけを一生懸命に育ててみようと思った。

生まれてから二か月もすると、娘はすぐにママである私を目で追いながら探すようになった。私の姿が見えなくなると、甘えるように泣き、ママの顔を見ると「抱っこして」と体をゆすった。初めて発した言葉も「マンマ」や「ママ」だった。

この世で私だけが娘の母親であり、娘に必要とされている人であることがとても幸せに感じた。

娘は物心がついたころから、私と散歩へ行くときには、玄関で私の靴をそろえてから自分の靴を履いていた。道路を歩くときも、私を歩道側に歩かせて、車が通ると私の前に両手を広げて車の方を向いて立ち、私を守ってくれた。私に何かを聞くときも私の人差し指を持って物に触らせながら

「これ、なーに？」

と聞いてきた。

誰かが教えたわけではなかったが、娘は私と暮らす中で、自然と私が見えないことを理解していったのだと思う。

私は娘が夜寝る前には、よく読み聞かせをした。私が読む本は点字の本で、童話や昔話などの短編を読んであげた。点字本の利点は、明かりをつけなくても読めることで、部屋を暗くした状態でも良かったし、絵も見ないので、想像力が養われたようである。娘は読書好きで、作文を書くのも好きになった。小学五年生のときに、夏休みの宿題で書いた作文が学校代表となり、市民ホールで市長から直接賞状をいただくことができた。その賞状は今でも金の額縁（がくぶち）に収められて、娘の部屋に飾ってある。

また私は、娘が病気になるといつもそばにいたし、発表会や授業参観には必ず主人やガイドヘルパーと出席した。娘の様子は見えないが、私がそこに居ることが大切であり、その積み重ねが娘との絆になっていると思う。

今、私が生きてきた人生を振り返って見ると、私がずっとこだわってきた「健常者の世界」も「障害者の世界」も現実にはどこにも存在しなかった。それは私の心の中にあったことに気付かされた。それまでの私は、視覚障害を持つ自分が、みんなからどう見られているのかということばかりが気になって仕方がなかった。周囲の評価ばかりが気になっていた。しかし、「差別の目」は、私自身の心の中にあった。自分に自信が持てず、臆病になっていた私の心の中にあったのである。

人生は常に弱い自分との葛藤なのである。私は私。長所も短所もある。視覚障害を持っている。でも、私には私にしか生きられない人生がある。もし、私が居ることで誰かが助かるとしたら、そこにこそ私が存在する意義があると考える。

私は人は誰かのために生きているときが一番幸せを感じるし、人は人のために生きることで、人として生かされるのだと思う。

二〇一一年三月十一日。岩手県陸前高田市のある中学校の校庭にあった桜の木が、津波で根ごと流されてしまった。その桜の木は、昨年の春にがれきの上に横たわったままの姿で花を咲かせたと話題になった。

津波で傷付いた桜。逆境に耐えて負けなかった桜。流れ着いた先が、たとえがれきの上であっても、桜の木の生命力が、桜の花を咲かせたのである。その姿はたくさんの人々の心を打ち、どれだけ励まされたことだろう。

人は環境に左右されやすいが、本当は環境ではなく、その人自身の生命力や生き様が大切なのではないかと思う。「心こそ大切」、その人の心の持ちようで、人生は大きく開けていくのだと思う。どんな姿であれ、どんな環境であれ、どんな境遇であろうとも、心さえ強ければその環境も変革し、周囲の人たちも幸せにできるのだと思う。

私はこれからも母として、教師として、そして一人の人間として、私しか歩めない人生をおう歌し、人々の心に勇気の花を咲かせていきたいと思う。あの桜の木のように……。

田辺美起

昭和三十九年生まれ　盲学校理療科教諭　神奈川県大和市在住

【受賞のことば】

受賞の連絡をいただいた時は、とても感動しました。この作品は、私が今まで生きてきた人生の中で、考えてきたことを書いたものです。文章で表現していくうちに、私自身も心の中がスッキリしました。これからも辛いことや苦しいこともたくさんあると思いますが、心を強くして、自分の人生を切り開いていきたいと思います。今回の受賞を励みにして、これからもがんばります。本当にありがとうございました。

選評

人が生きていくうえで、根源的な支えとなる珠玉の言葉が、さり気ない平易な語りのこの作品の中には、数え切れないほど登場するので、読んでいてまぶしいほどでした。二つだけ、ここに再録させていただこう。

〈私が「障害」という壁にきちんと向き合って挑戦し始めたときに、再び、私の目の前に道が開けたのである。〉

〈私がずっとこだわってきた「健常者の世界」も「障害者の世界」も現実にはどこにも存在しなかった。それは私の心の中にあったことに気付かされた。〉

それにしても、五歳の時、お母さんが将来の視力消失を予測して言い聞かせた言葉が、田辺さんの自己開拓の基盤になったのですね。挫折しては生きなおす田辺さんの歩みに、私は感動し涙しました。すばらしい文章を寄せてくださり、ありがとう。（柳田　邦男）